

アルベール・カミュ『異邦人』における声

阿 部 い そ み

序

アルベール・カミュの『異邦人』は、不条理の小説として知られる。「不条理」という語は、作者が作品を系列に分類した際の言葉でもある。1947年6月付の『手帖』に明らかのように、当初は5つの系列で構想されていた。

1^{re} série. Absurde : *L'Etranger* – *Le Mythe de Sisyphe* – *Caligula* et *Le Malentendu*.

2^e – Révolte : *La Peste* (et annexes) – *L'homme révolté* – *Kaliayev*.

3^e – Le Jugement - Le premier homme.

4^e – L'amour déchiré : *Le Bûcher* – *De l'Amour* – *Le Séduisant*.

5^e – Création corrigée ou *Le Système* – grand roman+grande méditation+pièce injouable.¹

第3の系列²に属する未完の小説『最初の人間』³が遺作となった現在、最終的にアルベール・カミュの作品は3つの系列に分類される。これらのうち第1の系列が不条理の系列であり、これに属するのが小説形式の『異邦人』、哲学エッセイの『シーシュポスの神話』、戯曲形式の『カリギュラ』及び『誤解』である。このように「不条理」⁴は、『異邦人』を理解する上で極めて重要な言葉である。それゆえ、この言葉が作品中で多用されているかのように思われがちである。しかし実際は、『異邦人』中1箇所（形容詞«absurde»）使われているに過ぎない。下記の引用にあるように、「absurde」は主人公が刑

務所付司祭を前に怒り叫ぶ場面で用いられている。

Du fond de mon avenir, pendant toute cette vie absurde que j'avais menée, un souffle obscur remontait vers moi à travers des années qui n'étaient pas encore venues et ce souffle égalisait sur son passage tout ce qu'on me proposait alors dans les années pas plus réelles que je vivais.⁵

この箇所こそ「不条理」が現れる唯一のくだりであり、『異邦人』にとって重要な意味を持つ場面⁶である。ところがしばしば指摘されているように、『異邦人』の中でも最も理解が困難な一節とされる。難解さをもたらしているのは、特に、暗い息吹がすべてを等価値にする、という文脈である。従来から「暗い息吹」*«un souffle obscur»*は、死との関連で解釈される傾向がある。

本稿ではこれまでの解釈に基づきつつも、新たに加える要素として「声」という視点⁷を提起することを目的とする。論述にあたっては、まず*«souffle»*の使用状況の分析から開始した。そして次に*«souffle»*における下の空間から上の空間への動きに着目し、解釈の方向付けを行った。以下において詳細を述べていく。

I

息吹*«souffle»*は、未来の底から主人公ムルソーに立ち上り、差し出されるすべてのものを等価値にする。未来の底から上昇し、あらゆるものを等価値にする息吹とは何か。*«souffle»*は『異邦人』中6箇所で使用されている。小説最終部の当該場面での2箇所を除く4箇所において、各々どのような意味で用いられているのかを考察してみよう。

まず、第一部第3章でレエモンの部屋から出たムルソーが階段の踊り場に佇む場面における*«souffle»*を取り上げる。

En sortant de chez lui, j'ai refermé la porte et je suis resté un moment dans le noir, sur le palier. La maison était calme et des profondeurs de la cage d'escalier montait un souffle

obscur et humide. (I, p. 1149)

この箇所「souffle」には形容詞「obscur」が付けられており、小説最終部の一節と共通する。またいずれも底から立ち上って来るという共通点も持つ。一方は未来の底から立ち上って来る「暗い息吹」であり、他方は、階段の底から立ち上って来る「暗い湿った風」である。第一部第3章での「暗い湿った風」及び小説最終部の「暗い息吹」を、死のメタファーとして捉える解釈がある。

ここでは、同じ「一つの暗い息吹」が死のメタファーとして用いられている。すなわち、未来の奥底からやってくる「暗い息吹」が、すべてを同等の価値のものにしてしまい、死を前にしては何ものも重要ではなく、すべては無差異（indifférence）なのである。⁸

「暗い息吹」は、このように死のメタファーとして解釈することによってその曖昧さは取り除かれる。というのも「souffle」と死との関連は、小説中の別の箇所にも見出されるのである。次に引用する「souffle」は、第一部第6章の太陽が強く降りそそぐ場面に現れる。

En chaque fois que je sentais son grand souffle chaud sur mon visage, je serrais les dents, je fermais les poings dans les poches de mon pantalon, je me tendais tout entier pour triompher du soleil et de cette ivresse opaque qu'il me déversait. (I, p. 1167)

「souffle」は「熱気」の意味で使われている。熱気は太陽によってもたらされたものだが、太陽とはムルソーを殺人行為へと導くものである。それは法廷内でのムルソーの発言（太陽のせいで殺害した）にも明らかである。「souffle」と死との関連は、第一部第6章中の別の箇所にも見出すことができる。アラブ人をピストルで撃つ直前の一節である。

Cette épée brûlante rongait mes cils et fouillait mes yeux douloureux. C'est alors que tout a vacillé. La mer a charrié un souffle épais et ardent. Il m'a semblé que le ciel s'ouvrait sur

toute son étendue pour laisser pleuvoir du feu. (I, p. 1168)

«souffle»は、海から運ばれて来る重苦しく激しい息吹である。太陽の熱気という«souffle»に加えて、海から運ばれる重苦しい«souffle»が、ムルソーを殺害行為へ誘うものとなる。この場面における息吹については、次の解釈がある。

「ある暗い〔得体の知れない〕息吹」は、ムルソーを殺人へと促し、《不幸の扉をたた》かせることとなった《海》の、すなわち〈悪い母〉の吐く《濃く熱い息吹》と重なろう。それに、「この息吹」が「すべて等し並にしていたのだ」という表現は、「死はすべてを等しくする」や「死はすべての身分の高低を均しくする」という成句的言いまわしを踏まえていようから、その点から見ても、それは死の「息吹」なのである。⁹

このように«souffle»は、成句表現からも死の息吹として捉えられる。ところで上記引用にもあるように、「souffle」には人間の内部から吐き出される「息」、「呼吸」の意味もある。『異邦人』における6箇所「souffle」のうち、すでに言及した5箇所では、外界に由来する「息吹」や「風」の意味で使用されている。しかし第一部第3章の下記に引用する場面では、「息」の意味で用いられている。

Nous étions hors de souffle, le camion sautait sur les pavés inégaux du quai, au milieu de la poussière et du soleil. Emmanuel riait à perdre haleine. (I, p. 1143)

ムルソーはエマニュエルと走り興じ、「息」を切らす。「souffle」の意味のうち、「息」は人間の内部からのものであるのに対し、「風」は外界に属するものである。『異邦人』最終部における「暗い息吹」は、「私の」未来の底から立ち上る。「私の」という表現に焦点を当てると、「souffle」とは、人間の内部に由来するものとして解釈できる。

人間の音声は大きく2つに分類される。有声音と無声音である。「息」とは無声音としての人間の声である。

次章では、小説最終部の«souffle»を「音声」という視点から考察していく。

II

«souffle»は未来の底から上昇して来るものであり、下の空間から上の空間へ向う動きを持つ。この小説において、下から上へ向う動きを持つものとして、他にどのようなものが描かれているだろうか。以下では、上昇の動きと共に描写されている対象を分析することを通じて、«souffle»と音声との関連を明らかにしていく。

第一部第3章の«souffle»すなわち「暗く湿った風」もまた、階段の「下から立ち上るもの」として描かれている。また第一部第5章の2箇所「souffle」のうち、一方は太陽によってもたらされる熱気であって、下から上への動きは持っていない。残り一方は、海から運ばれて来る重苦しく激しい息吹であり、海面という低空間から上昇する空気である。このように、小説中の«souffle»のほとんどに下から上への動きを認めることができる。そのため「下から立ち上るもの」とは、こうした「風」や「空気」に限定されるように思われる。しかしテキストをより仔細に見ていくと、「風」や「空気」だけではないことがわかる。例えば第一部第6章の次の箇所を見てみよう。アルジェの郊外にバスで降り立ったムルソーが、レエモンやマリイらと海を見下ろす丘を歩いていく場面である。

Un léger bruit de moteur est monté dans l'air calme jusqu'à nous. Et nous avons vu, très loin, un petit chalutier qui avançait, imperceptiblement, sur la mer éclatante. (I, p. 1161)

この箇所での「下から立ち上るもの」とは、トロール船のモーター音である。空気や風ではなく、音が立ち上る箇所は他にも見出される。次に引用するのは、第二部第2章に描かれる刑務所面会室の一節¹⁰である。

Ceux-là ne criaient pas. Malgré le tumulte, ils parvenaient à s'entendre en parlant très bas. Leur murmure sourd, parti de plus bas, formait comme une basse continue aux conversations qui s'entrecroisaient au-dessus de leurs têtes. (I, p. 1178)

アラブ人の囚人とその家族は、喧噪の中でも低い声で会話をする。その声は、地面から上方へ向う鈍いつぶやきである。このようにこの場面においても、「下から立ち上るもの」とは音であり、特にここでは人間の声である。また同じ章の最後の段落にも、立ち上る音が描かれる場面がある。

Le jour finissait et c'était l'heure dont je ne veux pas parler, l'heure sans nom, où les bruits du soir montaient de tous les étages de la prison dans un cortège de silence. (I, p. 1183)

夕方になると、ムルソーは独房で沈思する。そのとき刑務所のさまざまな階から、夕暮れの物音が立ち上って来る。独房での「下から立ち上るもの」としての音は、小説最終部にも見出される。刑務所付司祭を前にムルソーが怒り叫ぶ箇所直後には、次の文章がある。

Lui, parti, j'ai retrouvé le calme. J'étais épuisé et je me suis jeté sur ma couchette. Je crois que j'ai dormi parce que je me suis réveillé avec des étoiles sur le visage. Des bruits de campagne montaient jusqu'à moi. Des odeurs de nuit, de terre et de sel rafraîchissaient mes tempes. (I, p. 1211)

ムルソーは平静を取り戻し眠りにつく。眼を覚ましたとき、田園のざわめきが上って来る。

このように『異邦人』中で「下から立ち上るもの」とは、空気や風だけではない。さまざまな音もまた「下から立ち上るもの」として描かれている。具体的には、モーターの響き、人々のつぶやき、夕べの物音、田園のざわめきなどである。

先に述べたように、小説最終部の«souffle»は、従来から第一部第3章に描かれる場面（階段踊り場）と重ね合わせて解釈される傾向がある。実際、いずれの«souffle»も形容詞«obscur»で修飾されていると共に、底から立ち上って来るという特徴も持つ。

しかしこの小説には「下から立ち上るもの」として、空気や風以外に、音や声が多数描かれていることが認められた。さらに«souffle»を音として捉える視点に立つと、次に示す

第二部第3章の一節が極めて重要な意味を持つ。というのも、小説最終部の«souffle»が描かれる場面と多くの点で共通するためである。

第二部第3章の最終段落に、次の文章がある。

Dans l'obscurité de ma prison roulante, j'ai retrouvé un à un, comme du fond de ma fatigue, tous les bruits familiers d'une ville que j'aimais et d'une certaine heure où il m'arrivait de me sentir content. [...] tout cela recomposait pour moi un itinéraire d'aveugle [...] Et pourtant quelque chose était changé puisque, avec l'attente du lendemain, c'est ma cellule que j'ai retrouvée. Comme si les chemins familiers tracés dans les ciels d'été pouvaient mener aussi bien aux prisons qu'aux sommeils innocents. (I, p. 1194)

この箇所には、「私の疲労の底から」«du fond de ma fatigue»という表現¹¹があり、小説最終部の«du fond de mon avenir»と同様に下から上への動きを見出すことができる。また「私の」及び「底」という語¹²を用いている点でも共通する。そしてこの場面には、「暗い息吹」でも用いられた形容詞«obscur»の名詞形«obscurité»¹³を見出すことができる。ムルソーは護送車の「薄闇」«l'obscurité»の中にいるのである。さらに「盲人への道案内」«un itinéraire d'aveugle»という表現は、小説最終部での、未だやって来ない年月を通じて立ち上る道筋と重ね合わせることができる。また道案内は、無垢のまどろみと同時に獄舎にも通じる、とある。無垢のまどろみと獄舎は、同等比較級の表現で並べられ同列の扱いとなり、小説最終部のすべてのものを等価値にするという文脈に類似する。

このように、小説最終部の暗い息吹が描かれるくぐりぐぐりと第二部第3章最終段落の上記くぐりぐぐりは、多数の共通点を持つ。第二部第3章での「私の底」から立ち上るものが音であるように、小説最終部の«souffle»もまた音として捉えることができるのである。

III

「音」すなわち「息」としての«souffle»とは、『異邦人』においてどのような意味を持つのだろうか。「虚妄の人生の営みの間じゅう」という継続した時間の中で存

在する。第二部第2章にも、継続した時間の中で「音声」が描かれる場面がある。

アラブ人の囚人とその家族は、喧噪の中でも低い声で話す。その声は、地面から立ち上る鈍いつぶやきであると共に継続的なものである。

Le murmure des Arabes continuait au-dessous de nous. (I, p. 1179)

アラブ人のつぶやきは、下部空間で響き続ける。そのため、未来の底という下の空間から立ち上る«souffle»に類似する。アラブ人の声は、高音の話し声とは異なって低音部を構成するのである。そして、高い叫びではなくこのような低音の声とは、ポール・ヴィアラーも述べているようにアルベール・カミュの諸作品に共通する特徴に他ならない。

L'œuvre d'Albert Camus n'est pas de celles qui vous déchirent l'oreille. Le cri y est plus rare que le chuchotement. Une basse continue y retient les notes aiguës de monter trop haut.¹⁴

アルベール・カミュが創作活動で追求したものとは何か。『裏と表』再刊への序文で、作者は次のように述べた。

[...] qu'une œuvre d'homme n'est rien d'autre que ce long cheminement pour retrouver par les détours de l'art les deux ou trois images simples et grandes sur lesquelles le cœur, une première fois, s'est ouvert.¹⁵

アルベール・カミュは「かつて一度はじめて心がひらかれた2, 3の単純で偉大なイメージ」を生涯にわたって探究し続けた。それは『裏と表』で展開された世界である。そして『裏と表』の一作「肯定と否定のあいだ」は、『異邦人』と類似性を持つと指摘されている。特に『異邦人』最終段落においてムルソーが世界の無関心に心をひらくくだりは、「肯定と否定のあいだ」の下記に引用する一節と多くの共通点を持つ。

Personne dans la salle, les bruits de la ville en contrebas, plus loin des lumières sur la baie. J'entends l'Arabe respirer très fort, et ses yeux brillent dans la pénombre. Au loin, est-ce le bruit de la mer? le monde soupire vers moi dans un rythme long et m'apporte l'indifférence et la tranquillité de ce qui ne meurt pas. De grands reflets rouges font ondoyer les lions sur les murs. L'air devient frais. Une sirène sur la mer. Les phares commencent à tourner : une lumière verte, une rouge, une blanche. Et toujours ce grand soupir du monde. Une sorte de chat secret naît de cette indifférence.¹⁶

『異邦人』最終段落との類似点は、次のように指摘されている。

カフェの話者と同じように、主人公ムルソーは全身で世界の吐息を感じる。「星々のひかりを感じ」、「田園のざわめき」に耳を傾け、「夜と大地と塩のにおい」に彼はこめかみがさわやかになるのを覚える。世界の吐息が、「潮のように」彼の中に入ってきて、彼は静かに世界に溶け込んでいく。¹⁷

ムルソーと同じく「肯定と否定のあいだ」の話者は、「世界の無関心」に心をひらく。『異邦人』での「田園のざわめき」、「夜と大地と塩のにおい」、「眠れる夏のすばらしい平和」といった「世界の無関心」を呼び起こす諸要素は、「肯定と否定のあいだ」では「世界の吐息」*«soupir du monde»*と表現される。「世界の吐息」は、「下の方の町からの騒音」、「アラブ人が立てる深い息」、「海鳴りの音」、「海のサイレン」と同列に描かれている。したがって「世界の吐息」とは「音」¹⁸に属するものと理解することができる。また「長いリズムを刻みながら」と説明されているように、「世界の吐息」はリズムを伴って存在し、その点でも「音」とのつながりを持つ。

『異邦人』最終部の*«souffle»*は継続した時間の中で存在し、「肯定と否定のあいだ」に描かれる「世界の吐息」も同様の特徴を有する。というのも、「世界の吐息」は「相変わらず」*«toujours»*という継続を示す表現を伴っているのである。この表現は「肯定と否定のあいだ」中、別の箇所でも繰り返されている。

Maintenant le feu se recouvre de cendre dans le foyer. Et toujours le même soupir de la terre. Une derbouka fait entendre son chant perlé. Une voix rieuse de femme s'y plaque.¹⁹

「世界の吐息」は、「アラブの太鼓」や「笑い声」などと同列のものとして描かれる「音」である。また«toujours»と共に用いられ、継続した時間の中で存在するという特徴も持つ。「肯定と否定のあいだ」との類似がしばしば指摘される『異邦人』の最終段落には、「吐息」«soupir」という単語を見出すことはできない。しかし「息」を意味する単語«souffle»が最終段落の直前に（「暗い息吹」の文脈において）置かれているのである。このように『異邦人』最終部の«souffle」とは、「肯定と否定のあいだ」にも描かれた「世界の吐息」に通じるものと言うことができる。

結 び

以上において、『異邦人』最終部の«souffle»を「声」、「息」として捉えうることを示し、またそれが「肯定と否定のあいだ」で展開された「世界の吐息」に通じていることを明らかにした。

尚、『異邦人』及び「肯定と否定のあいだ」のいずれにおいても、継続した時間の中で存在する音声が描かれる場面には、ある共通要素が含まれているように思われる。それはアラブ人という存在である。『異邦人』第二部第2章に描かれる継続した音声とは、アラブ人のつぶやきである。また「肯定と否定のあいだ」での「世界の吐息」が説明される場面にも、「アラブ人が立てる深い息」や「アラブの太鼓」が描かれている。「世界の吐息」とアラブ人とはどのように関連するのだろうか。これについては、アルベール・カミュの他の作品²⁰も対象として«souffle»を詳細に分析することが必要とされる。この研究は別稿に譲りたい。

注

1. Albert Camus, *Carnets II : janvier 1942 - mars 1951*, Gallimard, 1964, p. 201.

2. ロットマンは、第3の系列の部分«3^e – Le Jugement – Le premier homme.»を作者が出版に際して書き加えたものであることを指摘している。: Herbert R. Lottman, *Albert Camus*, Seuil, 1978, p. 439.
3. 『手帖』の1956年付の文章では第3の系列は「愛」«l'amour»である。: «Le troisième étage, c'est l'amour : le Premier Homme, Don Faust. Le mythe de Némésis. La méthode est la sincérité.» (Albert Camus, *Carnets III : mars 1951 - décembre 1959*, Gallimard, 1989, p. 187).
4. クリステイアヌ・ショーレ＝アシュールは、『異邦人』の中に1930年代のアルジェリアにおける異民族間及び共同体間の緊張を読み取り、従来からの「不条理」のみに依拠する解釈に異議を唱えている。: 「[...] 不条理による説明がアルジェリアと植民地状況の問題とをいかに巧みに隠しおおすことを可能にしているかが理解されよう。」(クリステイアヌ・ショーレ＝アシュール『アルベール・カミュ, アルジェー『異邦人』と他の物語ー』大久保敏彦・松本陽正訳, 国文社, 2007, p. 111)。
5. Albert Camus, *Théâtre, récits, nouvelles*, «Bibliothèque de la Pléiade», Gallimard, 1965, p. 1211. 以下Iと略記し頁数と共に示す。尚, 引用文中の強調下線はいずれも筆者によるものである。
6. この場面についてクリステイアヌ・ショーレ＝アシュールは、次の指摘をしている。: 「<同国人>の拒否と、(挫折にしろ死にしろ) 排除を宣告する<他者>の拒否。この拒絶によって、フィクションのかたちを借りて、先行きの見えない歴史的状況を生きることの不可能性が示されているのである。」(クリステイアヌ・ショーレ＝アシュール, 前掲書, p. 64)。
7. 本稿は、アルベール・カミュの作品と発話の関係をめぐって考察した下記の拙論文の続稿である。: 「アルベール・カミュの作品における<話すということ>—『転落』と『追放と王国』について—」, 『山形短期大学紀要』第37集, 2005, pp. 1–16。; 「アルベール・カミュ「口をつぐむ人々」における<話すということ>」, 『山形短期大学紀要』第38集, 2006, pp. 19–36。; 「アルベール・カミュ「客」における<話すということ>」, 『山形短期大学紀要』第39集, 2007, pp. 1–17。; 「アルベール・カミュ「ヨナ」と演劇」, 『山形短期大学紀要』第40集, 2008, pp. 1–16。; 「アルベール・カミュ「生い出ずる石」における声」, 『山形短期大学紀要』第41集, 2009, pp. 1–13。

8. 三野博司『カミュ『異邦人』を読むーその謎と魅力ー』彩流社, 2002, p. 135。
9. 鈴木忠士『憂いと昂揚 カミュ『異邦人』の世界』雁思社, 1991, p. 376。
10. クリスティアーン・ショーレ＝アシュールは、この箇所について次の指摘をしている。：「この文章は移住植民地における曖昧な力関係についての最も明白なメタファーの一つであるように思われる」（クリスティアーン・ショーレ＝アシュール、前掲書, p. 87）。
11. «fatigue»と同じ«f»で開始される単語«futur»に置き換えると、«du fond de mon futur»が作り出され«du fond de mon avenir»と同義となる。
12. 『異邦人』全体で«fond»は15箇所で使用されている。小説最終部の「未来の底」（2箇所）という表現以外で、「底」の意味での使用は第二部第3章の「私の疲労の底」という一節のみである。
13. 『異邦人』全体で«obscurité»は2箇所で使用されている。残り1箇所は、第二部最終章の司祭の言葉の中に現れる。：«Mais, du fond du cœur, je sais que les plus misérables d'entre vous ont vu sortir de leur obscurité un visage divin.» (I, p. 1209)。
14. Hiroshi Mino, *Le Silence dans l'œuvre d'Albert Camus*, José Corti, 1987, p. 7.
15. Albert Camus, *Essais*, «Bibliothèque de la Pléiade», Gallimard, 1965, p. 13.
16. *Ibid.*, p. 24.
17. 松本陽正『アルベール・カミュの遺稿 *Le Premier Homme*研究』駿河台出版社, 1999, p. 83。
18. 音の重要性については次を参照されたい。：「特権的瞬間はこうして無関心によってもたらされるのだが、話者が世界の無関心を受容する際、そのもっとも大きな媒介となるのは、音である。」（松本陽正、同書, p. 78）。
19. Albert Camus, *Essais*, p. 27.
20. 『追放と王国』所収の作品「客」の次のくだりにも、アラブ人の音声（息づかい）が継続した時間と共に描かれている。：«Dans la nuit, le vent grandit. Les poules s'agitèrent un peu, puis se turent. L'Arabe se retourna sur le côté, présentant le dos à Daru et celui-ci crut l'entendre gémir. Il guetta ensuite sa respiration, devenue plus forte et plus régulière. Il écoutait ce souffle si proche et rêvait sans pouvoir s'endormir. (I, p. 1620)。